

## バイロン 散華への道のり

——抒情と諷刺を超えて——

上 杉 文 世

(1999年6月1日受理)

### 1. はじめに<sup>1)</sup>

周知のように、George Gordon Byron, 6th Baron (1788-1824) は、ギリシア独立戦争のさなかにギリシア西海岸の寒村ミソロンギオンで病死したが、詩人としてもっとも脂の乗りきった壮年期に、100巻までもと意気込んで書き進めていた代表作の *Don Juan* を第17巻で未完のまま、死を覚悟して独立軍の陣営に身を投じたのは何故か？ 単なる英雄主義や人道主義、あるいは、当時流行の philhellenism (ギリシア轟扇) に帰するには、あまりにも謎の多い死であった。没後175年を経た今日、なおこの疑問は十分に解明されたとは言いがたい。

詩人は、征服王ウィリアムに従ってノルマンディから来たバイロン家を父方に、スコットランド王家の血をひくゴードン家を母方にもつ、由緒ある貴族の出であったが、詩人としての道程もまた、ホメロス、アイスキュロスより、ダンテ、タッソへと流れるヨーロッパ文学の正統を踏む、従って、チャーサー、スペンサーに始まりシェイクスピア、ミルトン、ポーブへと連なるイギリス文学の伝統に則ったものであった。早くより詩人は、先輩詩人による様々な詩型を試みる一方で、神話や聖書、古典からの汎ヨーロッパ的イメージを自在に用いて独自の世界を築き、次第に内なる自我と伝統の枠を超えて、革新と動乱の時代の先駆者として「人間の自由」を謳い上げ、言行一致の英雄的生涯を全うした。本論では、抒情と諷刺のはざまを大きく揺れ動いた彼の詩行を辿りながら、バイロンを「早すぎる死」に向かわせた内的要因について考えてみたい。

### 2. 初期の詩に見られる男女像

主題の性質上、晩年の作品に重点が置かれることになるので、初期の詩に登場する

男女主人公の原型と理想像，イメージの推移・展開などについて簡単に触れておく。

「近代的自我の先駆者」としてのバイロンの姿をもっとも鮮明に映し出した作品は劇詩 *Manfred* であるが，その出版に際して詩人は，「主人公のマンフレッドには，他の作品の主人公同様，少年時代に愛読したアイスキュロスのプロメテウスの影響が大きい，メディアへの熱愛も同様である」と述べて，<sup>2)</sup>バイロン詩の男女両性の原型が，天上から火を盗み人間に与えたため鎖で繋がれ禿鷹に肝臓を啄まれた「犠牲の英雄」プロメテウスと，「有翼の竜車」に乗りエリュシオンの野を治め英雄の再生を司った「犠牲を要求する女神」メディアの両者であることを明らかにしている。<sup>3)</sup> また，愛読したオシアン詩の主人公によるオシアン自身とその恋人の描写の卓越を称えて，心寛く勇壮な，「悲愁に満ちた運命の受難者」“subjected to the most melancholy vicissitude of fortune”と，慎ましやかに「優しく頬を染める美女」“the mildly blushing Everalin”との結びつきに，バイロン美学の真髄を見せている。<sup>4)</sup>

バイロンの文壇登龍門となった *English Bards and Scotch Reviewers* は，チョーサー以来，ドライデン，ポープによって完成されたイギリス詩の古典的詩型 heroic couplet を用いた文壇諷刺詩で，終生古典遵守を貫いたバイロンの姿勢がすでに明確にされている。またそれは，詩歌の革新を謳う湖畔詩人らを「詩神アポロンの玉座の篡奪者」と見做し，「時代の悪弊」からイギリス詩を救い，彼の処女詩集を酷評したスコットランドの批評家に反撃を加えるという文壇への挑戦状でもあった。怪物ヒュドラに譬えた批評家退治にヘラクレスの怪力を望んでこの諷刺詩の序文を結んでいるが，このギリシア世界第一の英雄は，後にバイロンの死に深く関わることになる。

詩人を一朝にして有名にした *Childe Harold's Pilgrimage* は，*The Faerie Queene* の詩型 Spenserian stanza で書かれ，「シェイスクピア以後もっとも奔放な詩的エネルギー」との称賛を得た抒情美に溢れており，<sup>5)</sup> *Don Juan* の諷刺と双璧をなすバイロン詩の精髓である。パラス・アテナへの呼びかけで始まる第2巻は，「失われた理想美」への挽歌と見做されるが，英雄たちを繁栄に導いたこの女神の神殿の荒廃に詩人の嘆きは深く，トルコ帝国の支配に甘んじてきた隷属の民に決起を呼びかける――

美わしのギリシアよ！ 消え失せし精華<sup>はな</sup>の悲しい面影！  
 もはや存在しないが不朽なるもの！ 滅び去ったが偉大なるもの！  
 いま 四散したなんじの子らを率いて  
 長く慣らされてきた束縛を 断ち切るものは誰か？

(『チャイルド・ハロルドの巡礼』II. 73. 1-4)

奴隷の鎖を絶ち、アテナの失われた微笑みを取り戻すべく「愛と自由の聖地」奪回に殉じる「その英雄は誰か?」、バイロンの死がこれに解答を与えるのは、15年後のことになる。レオニダスの率いるギリシア勢が死守した古戦場テルモピュライの「自由の聖地」、「愛と犠牲」のイメージは、ミソロンギオンへ詩人を導く要因となるのである。

*Childe Harold's Pilgrimage* 1・2巻は、社交界のうら若いおとめに捧げられたが、その献辞では、儂い虹に「理想美」が象徴され、「この胸が空しく焦がれるあの微笑み」(“To Ianthe”, 32)と憧憬をこめて歌われており、少年の日の恋人の「虹」の美しさが詩作の機縁になったと述懐するバイロンの、<sup>6)</sup> 長篇詩の巻頭を飾るに相応しい抒情の精髓である。最終巻ではこの「虹」は、「愛の憧憬」と「自由への悲願」をこめて「滝」(*Harold IV*, 72)や「血と涙の洪水」(*Harold IV*, 92)の上に懸けられて、抒情詩人バイロンの面目を発揮するにいたる。<sup>7)</sup>

新進のホイッグ党議員として、機械破壊者とアイルランドのカトリック教徒救済を訴えた上院での演説で注目を浴び、<sup>8)</sup> 反逆の物語詩 *The Corsair* の成功によりヨーロッパの自由の象徴的詩人となっていたバイロンは、1814年、ナポレオンがエルバ島へ流されたとき、失望と侮蔑をこめて諷刺詩 *Ode to Napoleon Buonaparte* を書いたが、そこでは、「失墜の覇者」ナポレオンは、同じ失墜の運命を甘受したヘレニズム・ヘブライズム両世界の「光の英雄」、「明けの明星」ルシファーとも、「火の盗人」プロメテウスとも呼ばれ、「悪の元凶」と見做されている (*Napoleon*, 8, 136)。

結婚の破綻を機に自らに流滴の運命を課し、レマン湖畔やアルプス山中をさすらうにいたったバイロンは、夫を社会的に葬った妻アナベラを、トロイから凱旋した夫アガメムノンを謀殺したミュケナイの王妃クリュタイムネストラに譬えて、“The Moral Clytemnestra” (“Lines on Hearing that Lady Byron Was Ill”, 37)と呼び、抒情から諷刺の対象におとしめている。劇詩 *Manfred* では、アナベラを「蛇の微笑み」と諷刺する一方で、姉オーガスタの化身と見做されるヒロインのアスタルテには「頬を紅に染めて」登場させて、諷刺と抒情の両極を垣間見せている (*Manfred* I. i. 242, II. iv. 99)。僧院長の救いの手を拒み地獄へ墜ちてゆくマンフレッドに、タルタロスへ墜ちてゆくプロメテウスの姿を重ねていたのは言うまでもない。

シェリーと過ごしたレマン湖畔の夏は、バイロンを、専制者の暴虐に対する抵抗精神の賛美へと駆り立てた。その一つ、愛国の士 Bonnivard の不屈の魂を称えた物語詩 *The Prisoner of Chillon* の巻頭では、自由のための「犠牲の祭壇」(“Sonnet on Chillon”, 10)が謳われ、いま一つの抒情詩 “Prometheus” では、シェリーとともに読んだアイスキュロスの原文 *Prometheus Desmotes* により火を点じられた詩人の反逆精神が、レマン湖の嵐、稲妻、滝、氷河、自らの失墜感覚、専制という時代の嵐、

人類愛と共鳴して作用し合い、かつての罪人プロメテウスは、「人類の救済者」とな  
て甦る——<sup>9)</sup>

なんじの犯した「神のような」罪とは 心優しきことであり

なんじの導きによって

人間の悲惨を減らし

知性を与えて 「人間」を強くすることであった

...

なんじの運命と力とは 「死すべきもの」にとって

象徴となり 合言葉となった

(「プロメテウス」35-38, 45-46)

「予知する者」プロメテウスの不撓の抵抗精神は、やがて新しい時代の象徴、革命の旗  
標となり、バイロンを「詩人の使命」の考察へと導いてゆくことになる。

月に照らされたローマの廃墟をさすらうバイロンは、多くの人々の血を吸ったコロ  
セウムを「復讐の女神」の神殿と見做し、その祭壇に「数奇な己が生の記録」である  
*Childe Harold's Pilgrimage* 第4巻を「供物」として捧げ、復讐の成就を告げている。  
この大作の成功により詩人としての不滅の名声を得ることで、アナベラや母国の俗物  
どもに復讐を遂げ、「古典の殿堂」を侵す時代の悪弊を正し、蛇を退治して神性を得た  
とされる「詩神」アポロンを玉座に復帰させたと確信する。<sup>10)</sup> この達成感が、バイロン  
を抒情から諷刺へ向かわせる機縁になったと言えよう。

### 3. 放縦ほうしゅうの詩 *Don Juan* 文壇・社会諷刺

ロマンティシズムの粹を尽くした *Childe Harold's Pilgrimage* の脱稿2週間後  
には、バイロンは、自分を含む同時代の詩人とポーブとの間には言葉に表せないほどの  
隔たりがあるとの古典主義的理念を表明し、やがて「ポーブ擁護」をめぐるボウル  
ズと熾烈な論争を繰り広げ、<sup>11)</sup> three unities (三一致の法則) を遵守した一連の劇詩や、  
イタリア古典文学に倣った詩作に没頭するなど、もっとも古典的色彩の濃い時代に入  
って行く。ボッカチオ、タソー、アリオストラルネッサンスの叙事詩人によって確立  
され、プルチ、カスティらがバーレスクに用いたイタリア文学伝統の詩型 ottava rima  
(iambic pentameter で abababcc と押韻する8行連) を、バイロンはバーレスクの諷  
刺精神とともに受け継ぎ、*Don Juan stanza* と呼ばれるまでにイギリス詩の伝統に定

着させた。主人公のジュアンは、セヴィリアの伝説的好色漢ドン・ファンのパロディで、最終巻で地獄へ落ちるべく運命づけられたプロメテウスの像と重なり合うのは言うまでもない。

時の桂冠詩人サウジーに宛てられた *Don Juan* の dedication は、「虹への憧憬」を歌った *Childe Harold's Pilgrimage* の献辞とは対極的に、シェリーをも驚かせたほど激しいもので、そこでは、イギリスの文壇と政界を代表する二人の Robert —— 桂冠詩人サウジーと外相カースルレイ —— に的を絞り、痛烈な諷刺の矢を射かけている。責任の重い立場にありながら、施す術もなく母国イギリスを荒廃と腐敗の中に放置した彼らの無能と、それが非難されるどころか敬意をもって遇される虚偽と専制に満ちたイギリス社会は、バイロンの義憤を呼ばずにはおれなかったのである——

ポップ・サウジー！ きみは詩人 それも桂冠詩人だ

つまり われら民族全体の 代表というわけだ

きみがついに トーリーになりさがったのは事実だが

(『ドン・ジュアン』献辞 1. 1-4)

熱烈な自由主義者、革命の賛美者からトーリーの桂冠詩人となり、専制への阿諛をことする卑劣な変節者サウジーへの軽侮をこめた呼びかけで始まるこの献辞では、やがて同様に変節をとげた湖畔詩人 (Lakers) に諷刺の矢が向けられてゆく。コールリッジの *Biographia Literaria* の難解には解説が要るほどだと皮肉り、ワーズワスの *The Excursion* については、「ちょいと長すぎる『逍遙』」とその冗長を揶揄し、

それに あれを理解できる者は 「バベルの塔」のその上に

もう一階建て増すことさえ 出来ようというもの

(『ドン・ジュアン』献辞 4. 7-8)

と、周知の「昏迷」のイメージを用いてその晦渋を諷刺している。摂政皇太子に諂うかつての自由主義者の変節と物欲を「黄金の改鑄」に譬える一方で、バイロンは、クロムウェルに協力したミルトンを、

たとえ 不運に見舞われ 中傷にまみれて零落した

ミルトンが 「時」なる復讐者に訴えたにせよ

...

「彼」は父王を憎みながら その愚息を称えたりはしなかったし  
暴君憎悪者として始めた生涯を 貫きとおして閉じたのだ

．．．

「彼」はサルタンなど 称えようとしたらどうか？ また「彼」は  
あの知性の宦官カースルレイなどに 従おうとしたらどうか？

(『ドン・ジュアン』献辞 10. 1-2, 7-8; 11. 7-8)

と、王政復古の逆境にあっても暴君憎悪の清教徒として貫いた生き方を賛美し、「知的無能者」たるカースルレイに屈従する湖畔詩人の無節操を非難する。

冷血漢で猫かぶりの 落ちつきはらった悪党め！  
滑らかで未熟な手を エリンの血糊にばちゃつかせ

．．．

全人類を拘束する 手枷を継ぎはぎして  
古びた鎖を繕う 鋳掛け屋の奴隷製造人

．．．

．．．イタリアよ！

最近息を吹き返したばかりのなんじのローマ魂は この政治野郎が  
なんじに吹きかける虚偽の下で 息絶えんとしている  
重く引きずるなんじの鎖や いまだ生々しいエリンの傷は  
権利を主張し——弁舌さわやかに <sup>こわだか</sup>声高にわたしに訴える  
ヨーロッパはなお 奴隷を 同盟国を 国王を 軍隊をもっている  
しかるにサウジーは永らえて <sup>よこしま</sup>いとも邪にそれらを称えている

(『ドン・ジュアン』献辞 12. 1-2, 14. 6-7, 16. 2-8)

もっとも鋭い諷刺の矢は、内政・外交上の反動的圧制者たるカースルレイ本人に向けられ、彼がもたらしたアイルランドとイタリアの窮状があばかれている。

ところで 桂冠詩人どの わたしはきみにこの歌を  
率直で気取らぬ韻文にして 献呈する運びなのだが  
お世辞たらたらおもねる調べで 褒めちぎることをしないのは  
わたしが今なお わが党の色「淡黄と青」に忠実であるからだ

今のところわたしの政略は ひとえに啓蒙することにある

変節が大はやりのこの時世に 「一つの」信条守り通すことは

まさにヘラクレス的とも言える 偉業になってしまったのだ

そうではないか 背教者ユリアヌス顔負けの トーリー党员サウジー君？

(『ドン・ジュアン』献辞 17)

「解放されないヨーロッパ」を座視する無能な桂冠詩人への呼びかけでこの献辞は結ばれるが、変節者が輩出する時世にホイッグ党员としての信条を保持することは、「ヘラクレス的難業」であると言いながら、「自由解放の詩人」としての自らの旗標を鮮明にしている。若き日の諷刺詩の序文で遠慮がちにその登場を望んだ英雄ヘラクレスの名は、*Don Juan* では使命感を帯びた自負として、自信に満ちて述べられている。ottava rima という詩人にもっとも相応しい詩型を得て、ユーモア溢れる口調で彼自身の人生と時代を批評し、ポープ、ドライデンが理想とした「社会に巣くう悪弊の諷刺」に力を揮い、ミソロンギオンに斃れるまで、詩人の「思想の敵との言行一致した戦い」は続けられる。21世紀の幕が開かれようとする今日なお、アイルランドをはじめ世界の各地に民族紛争が続き、「血と涙」の雨が絶えない現実を思うとき、上院でアイルランドのカトリック教徒の解放を訴え、また「社会の公器」たる諷刺詩で、いち早く当局の無為無能を弾劾してその禍根を衝いたバイロンの炯眼には、プロメテウス的人類愛と予見性が窺われるが、heroic couplet と ottava rima の違いこそあれ、諷刺詩の序文の結びに、決まって世直しの救済者としての「ヘラクレスの力」が翹望されていることに注目しておきたい。

初期の諷刺詩でみせた古典遵守と批評不信の姿勢は、晩年の諷刺詩でも変わることなく貫かれ、モーセの十戒のパロディ poetical commandments に集約されている。

なんじ ミルトン ドライデン ポープを信奉すべし

なんじ ワーズワス コールリッジ サウジーを祭り上げるなかれ

なんとなれば第一の者は 回復の望みなき狂人にして

第二は飲んだくれ 第三はきてれつ極まりなき多弁家なれば

クラブと腕張り合うは 至難なるやもしれず

また キャンブルの詩の霊泉は いささか枯渇の兆しあり

なんじ サミュエル・ロジャーズの詩句を剽窃するなかれ

また ムアのミューズと姦——否——いちゃつくなかれ

...

なんじ 書くなかれ つまり われの望むもののほかは  
これぞ 真の批評なり・・・

(『ドン・ジュアン』 I. 205, 206. 5-6)

ワーズワスの詩の「晦渋」や主題の「卑近」は、古典のパロディを重ねて揶揄される。

ホメロスも時に居眠りをするとは ホラティウスの言うところだが  
彼から学ばなくてもわかっている ワーズワスが時には目覚めて書くことは  
もし彼が天空なる平原を 一気に<sup>あまかけ</sup>天翔りたいと切に望みながらも  
ペガソスが彼の「荷馬車」曳くのを渋り 後ずさりするようなら  
シャルルマーニュ帝の「四輪車」を拝借願ってもよかったのではないか  
あるいはまたメデアに懇望すれば 女神の<sup>ドラゴン</sup>竜 一匹ぐらい借りられたらうに  
・・・

「行商人」に「小舟」 そのうえ「荷馬車」とは ああ 恥ずかしい！  
ポーブ ドライデンの霊よ ここまでわれら墜ちていたとは！  
こういった<sup>てい</sup>体のがらくたは 軽蔑をはぐらかすばかりか  
急転落下の深淵から 浮き泡よろしく表面に  
浮き上がってくる・・・

(『ドン・ジュアン』 III. 98. 1-2, 99. 1-4, 100. 1-5)

ホラティウスが『詩学』で述べた「ホメロスも時々居眠りをする」をもじって、ワーズワスの詩の冗長・晦渋をからかい、湖畔詩人の物語詩『荷馬車曳き』*The Waggoner*のペガソスには、シャルルマーニュ帝の豪華四輪車や女神メデアのチャリオットの「有翼の竜」を借りれば自在に天翔ることもできたのにと、その主題の卑俗を茶化す一方で、「崇高は深みである」とするロンギノスの『崇高論』のパロディにより、同時代の詩の誇大と滑稽を罵倒したポーブに倣い、ワーズワスの“pedlar”(行商人)、“boat”(小舟)、“waggon”(荷車)という卑近な題材への嫌悪感をあらわにし、「泡のように表面に湧きあがる」と<sup>12)</sup>その詩風を罵倒している。*Don Juan*でバイロンが見せる笑いの境地は、覚めた眼で冷静に現実を受け止めることによって得られたもので、「私の機の傍らから離れぬ悲しい真実は、かつてロマンティックであったものをおどけに変える」(*Juan* IV. 3. 7-8)と言うように、夢から諦観への悲しい歩みの跡でもあった。



若き日の抒情のイメージの粹であった「虹」は、晩年のバーレスクでは――

「おまえの空には まだ多くの虹が懸かっているが  
おれのはもう消え失せてしまった 人生のはじめには  
誰だって 熱い情熱と高い理想を抱くものだが  
「時」がおれたちの虹から その彩りを削いでゆき  
なにか大きな思い違いをしては 一つまた一つと順ぐりに  
蛇のように 年ごとに きらびやかな皮を脱ぎ捨てていくのだ」  
(『ドン・ジュアン』V. 21. 3-8)

と、「蛇の脱皮」の比喩を用いて、その幻想性を嘆いている。

主人公ジュアンがサルタンのハレムで女装する滑稽な場面では――

それから彼は悪態をつき さらにため息をつきながら  
肌色シルクのパンタレットを するりと身につけた  
次いで身を固めたのは 処女帯であったが これを  
ミルクのように真っ白い 薄いシュミーズの上から締めつけた  
だが ペティコートを引きあげるとき ふらついた  
それは 英語では which と言い スコットランドでは whilk となる  
(韻のつごうで こう言わざるを得ないのだ 時に  
韻というものは 王侯以上の権威をふるうものだから)  
(『ドン・ジュアン』V. 77)

“silk”, “milk” に “whilk” と押韻させ、さりげなく「韻の規制力」を「圧制の桎梏」  
諷刺の具として笑いを誘うが、これは、第7・8行のカプレットを巧みに生かした奔  
放な例である。「押韻の足枷」を五重に重ねて重く引きずらせ、専制への諷刺をさらに  
家庭の圧制 “petticoat-government” (かかあ天下) にまで敷衍した次のカプレットは  
〔下線は筆者〕、「押韻の名手」としてのバイロンの面目を窺わせている。<sup>13)</sup>

But—Oh! ye lords of ladies intellectual,  
Inform us truly, have they not hen-peck'd you all?

ああしかし 知的な奥方をもつ殿方諸君よ！ 正直に教えてくれ

奥方は君たちすべてを 尻に敷いてきたのではなかったか？

(『ドン・ジュアン』I. 22. 7-8)

同時に、別の諷刺詩*The Blues*でも青錆ぶりを皮肉られた別居中の妻アナベラや、*Don Juan* 執筆の中断や再開にも嘴を入れた愛人テレサらの面影も垣間見えて、人生批評の書としての*Don Juan*の普遍性が発揮されている。

#### 4. 犠牲の決意——ギリシアの大義

青春の旅以来、詩人が抱き続けたギリシアへの「愛と自由」への情熱は、*Don Juan* 第3巻の婚宴に招かれた弾誦詩人の口を借りて甦り、抒情的に歌われている。

われは夢みぬ ギリシアなお自由たりうると

...

母なる大地よ！ なが胸よりわれらに返せ

わがスパルタの<sup>たけ</sup>猛き死者を 僅かにても！

三百のうち せめて三人<sup>みたり</sup>を許し与えよ

新しきテルモピュライ 再来のために！

...

スーリの<sup>いわお</sup>巖と パルガの岸に

ドリスの母らの 生みしごとき

勇猛の血のなごり いまも流れて

そこに おそらく <sup>たね</sup>種子の蒔かれてあらん

ヘラクレイダイの 血筋ひく勇者の！

...

われを置け スニオン岬の<sup>なめいし</sup>大理石の断崖に

かたみに奏でる囁きに 耳傾けるもの

波とこの身のほか 何も無きところに

そこにてわれを 白鳥のごと 歌いて死なしめよ

わがものとはすまじ 奴隷の国は——

投げうち砕け サモスの赤き葡萄の酒杯を！

(『ドン・ジュアン』III. 86. 704, 727-30, 762-66, 779-84)

マラソンの古戦場に立ち「ギリシアの自由」を夢見た若き日を想い、「新しきテルモピュライ」再現のためスパルタの勇士の蘇生をねがい、いまなお命脈を伝える「ヘラクレスの末裔」の奮起を促す詩人の熱情は、「スニオン岬の大理石の断崖にこの身を置け」との第16節をもって断ち切られており、沸々と湧き上がる感情の高まりを窺わせている。バイロンの時代すでに、スニオン岬のポセイドン神殿はアッティカの大地母神アテナのものと見なされていたので、<sup>14)</sup>「崖の上の大理石の祭壇」と「犠牲の血」を結び付けることは極めて至当であり、当時すでに詩人の心中に「犠牲の祭壇」への自覚が育まれていたと見て差し支えあるまい。

ラヴェンナ時代、この地に果てたダンテの墓に詣で詩聖への想いを重ねていたバイロンは、*Divina Commedia* の詩型 *terza rima* を用いて物語詩 *The Prophecy of Dante* を書き、予言的な眼をもってイタリアの歴史・文学を顧み、イタリアの、さらには、人類の未来を展望する。自由を圧迫する反動の嵐が吹き荒れる中で緊迫した悲壮感を漂わせ、流謫の詩聖ダンテと自らの運命を重ね合わせつつ、カウカソスの岩山に想いを馳せ、「詩人の使命」を追求し、自らに問いかける――

名もない「詩人」は多い 詩作とは  
 溢れる感情から 善や悪を創造し  
 われら人間の運命を超えた  
 絶対の生命を志向し  
 新しき人類の 第二のプロメテウスたらんとすることか？  
 げに彼は 天上より火を授けながら その喜びが  
 苦痛で報いられると悟るのが 遅すぎた  
 空しくもその高貴なる贈り物を  
 惜しみなく与えながら  
 秃鷹に その胸を啄まれ  
 海辺の寂しき岩に 繋がれて横たわるとは  
 (『ダンテの予言』IV. 10-19)

常に弱者、虐げられた人々の側に立ってきたバイロンは、人間のために火を盗み永劫の罰を受けた巨神の運命を自らのものとし、「第二のプロメテウスとして生きる」のが「詩人の使命」ではないかとの思いにいたったのである。

*The Prophecy of Dante* が書かれた1820年は、前年に母国のピータールーの虐殺、スペインの革命、ナポリの反乱、カルボナリの挫折が続き、さらに翌年のギリシアの

決起へと導く、ヨーロッパの専制の鎖がもっとも重く民衆を抑えた年であった。少年時代より常に念頭を離れなかったと詩人が自認するプロメテウスの抵抗精神は、時代の嵐に鍛えられ、シェリーが鼓舞した革命思想とも相まって、新しい時代を導く烽火とも、また、民族解放の旗標ともなっていく。

現実の詩人は、イタリア統一の悲願をこめた秘密結社カルボナリの運動に同調し、寄寓する愛人の館を兵器庫と化してこの民族独立運動を支援している。従来、ラヴェンナ時代のバイロンについては、「ただれた遊蕩貴族の愚かな生活」と印象づけられがちであったが、<sup>15)</sup>それは皮相的な見解であることを指摘しておきたい。Ravenna Journal に記された詩人の心境は、時代、民族、国籍を問わぬ自由への献身の表明として、崇高な響きをもって読む者の胸を打つ。当局が反乱を鎮圧しようとしているとの情報を得た詩人は次のように記して、時代に先んじた、巨神さながらの炯眼を披瀝している。

民衆はいずれ打ち碎かれるであろうが、王権の時代は急速に終ろうとしている。血は海のように、涙は霧と流されようが、最後には民衆が勝利を収めるであろう。私は生き永らえてそれを見ることはできまいが、それを予見することはできる。

(「ラヴェンナ日記」1821年1月13日)

さらにその翌月には、

今日は、カルボナリの同志からの連絡はなかった。だが、それはともかく、私の階下の部屋は、彼らの銃剣や旧式銃、弾薬筒等々で溢れている。彼らは私のところを<sup>へいたんぶ</sup>兵站部だと頼りにしているようだ。一旦事ある時は、自分が犠牲になればよいのだ。イタリアの解放を思えば、誰が、何が犠牲になろうと問題ではない。それは壮大な目的、政治の「詩」そのものだ。ひたすら思え——解放されたイタリアを!!

(「ラヴェンナ日記」1821年2月18日)

と、カルボナリの指導者としての心の昂りを見せている。民衆の勝利を予見する者の、崇高なまでの自己犠牲。この一連の緊迫した手記は、散文の名手としてのバイロンの声価を高めるものであるばかりか、遊蕩貴族の慰みや気まぐれでは決して成し得ない高貴な精神——「第二のプロメテウス」による自由の予見と犠牲の覚悟——の表れに他ならない。

ハロウの少年時代よりもっとも深くバイロンの脳裏に刻印されていた英雄プロメテウスの像は、詩人としての模索と研鑽、時代の嵐に喚起された圧制への反逆精神、人

生経験の深化による自我の超克等を経て、さらに、これらの相乗作用によって、ようやくこのラヴェンナ時代にいたり、古来、詩人たちがもってきた予言性と巨神の自己犠牲の精神を結合させ、バイロンの前に「詩人の理想像」として甦るのである。ミソロンギオンへの「行動」を起こす前の3年足らずの間、イタリアの熱風にも煽られて、詩人バイロンの「ペン」は、止まるところを知らぬ戦いの趣を見せてくる。

執筆が再開された *Don Juan* の後半では、偽善と圧制、戦争という時代の悪は仮借なくあばかれ、白熱したペンは諷刺の嵐を巻き起こす。

ああ 栄光に満ちた月桂樹よ！ なんじという  
空想上の不滅の樹の ただ一枚の葉のために  
退くことなき 血と涙の海が流されねばならぬとは！

(『ドン・ジュアン』VII. 68. 6-8)

『ハロルド』で見せた「虹」の抒情美も消えさり、栄光の不滅という幻想に惑わされて、その一枚の葉の陰で退くことなく流される民衆の「血と涙の海」が、悲しみをこめてあばかれる。とりわけ、戦争の冷酷・不条理・罪悪を弾劾するバイロンのこの真摯な叫びは、戦争諷刺の白眉として、時代に先駆けた崇高な響きをもって現代のわれわれに訴えてくる。<sup>16)</sup> それは、イギリス文学では、第1次大戦下に R. Graves, W. Gibson, S. Sassoon, W. Owen, H. Read らの戦争詩が輩出するまで、バイロンの独壇場の観がある。また、広く世界的視野に立っても、トルストイの『戦争と平和』(1864—69)に半世紀近くも先んじており、僅かに、絵画世界の巨人ゴヤの一連の戦争諷刺画——ナポレオン軍に対するスペイン人の抵抗を描いた凄惨な連作——のみが、バイロンの戦争諷刺詩に競い得るものと言えよう。

しかし つまるところ 「自由」のための戦士をのぞいては  
すべて「殺人」というおもちゃ弄ぶ <sup>もてあそ</sup> <sup>こわっば</sup> 小童に過ぎないのだ

彼らは今もそうであり——今後もそれは変わらぬだろう

しかし レオニダスとワシントンの場合は違う  
彼らの戦場は いずれも聖なる地で そこは  
救われた民族の香りかぐわしく 朽ちた世界の臭いはしない

・・・

・・・この二人の名こそ

未来に自由がおとずれるまで 合言葉になるであろう

(『ドン・ジュアン』VIII. 4. 7-9, 5. 1-3, 7-8)

自由のための戦いのみを「聖戦」として正当化し、アメリカ独立戦争の英雄ワシントンとテルモピュライを死守したレオニダスを賛美するのは、バイロンの一貫した戦争批判の姿勢であったが、この詩行には、この両英雄の名を「合言葉」として、人類が真の自由を獲得する日を信じ、やがてその信念に殉じていくことになる、詩人の情熱がたぎっている。

戦争に対する諷刺は、必然的に暴君とその追従者へと赴き、ロシアの専制君主エカテリーナ二世、母国のジョージ四世、外相カッスルレー、将軍ウェリントンを槍玉に挙げ、露骨に、茶化しながら、専制への憎悪をたぎらせていく。人生を達観することによって得られる悲しい真実、笑いの底に漂う詩人の孤独な知性、「孤高の魂」を読み取りたい――

少なくとも言葉によって わたしは戦うつもりだ (そして――もし

機会がくれば――行為によっても) 戦おう

「思想」に敵対する者すべてを相手に――そして「思想」の敵のなかでも

とびきり横暴なのは暴君とその追従者だ それは昔も今も変わらない

・・・

・・・それは このわたしの

あらゆる民族のあらゆる圧制への あからさまで断固とした

率直きわまる憎悪への なんの障害にもなりはしないのだ

・・・

・・・わたしの願いはただ一つ 人々が自由になること

王侯からと同様 暴徒からも――私からと同様 君からもだ

(『ドン・ジュアン』IX. 24. 1-4, 6-8; 25. 7-8)

思想の敵への言行一致した戦い・自由解放への願いが高らかに宣言されているが、これが単なる空論でないことは、間近に迫った詩人の死が証明することになる。

## 5. ヘラクレス登場――理想美への献身

カルボナリの反乱が鎮圧されて一月後の1821年の3月、アルカディアの奥深い山峡

の僧院にギリシア独立の反旗がひるがえり、反逆ののろしは燎原の火のようにギリシア全土へと拡がっていく。ピサに移ったバイロンは、かつて青春の旅で自ら鼓舞したギリシアの蜂起が実を結ぶのを、その反乱の行方を、注意深く見守っている。ロンドン時代からしばしば、“I must return to the East to die.”と口にしていただけと伝えられるバイロンは、<sup>17)</sup> その翌年の1822年8月には、「愛するギリシアのためギリシア人と共に戦いたい」との願望を表明している。<sup>18)</sup> レオニダスの戦場テルモピュライがふたたび聖地として甦るが、「熱い水路」を意味するこの地峡の名は、夫の愛を取り戻そうとした妻のディアネイラが塗った肌着の毒に身を灼かれたヘラクレスが、痛みに耐えかねて流れに飛び込んで以来、その川水は煮えたぎっているとの伝説に由来する。

人々がならず者の君主らに 法破らせて意に介さぬのを見ると  
わたしの血は ヘクラ火山の熱泉のように 煮えたぎるのだ  
(『ドン・ジュアン』XV. 92. 7-8)

と、圧制と阿諛への憎悪に「熱血」の比喻を用いて、エウリュステウス王の暴虐に反逆の血をたぎらせつつ12の功業をなし遂げた英雄ヘラクレスと、自由の聖地テルモピュライとの距離を縮めている。

カルボナリの挫折を経験し、今また、ギリシアの理想美に殉じようとするバイロンにとって、世人のあざ笑うドン・キ・ホーテの冒険は、虚構の主題から「もっとも崇高な情景」の相を帯びてくる。

不当な危害を修復し 悪事に報復する  
深窓の<sup>おとめ</sup>姫君を救い 卑劣漢を打ちのめす  
結束した強敵に 一人で立ち向かい  
虐げられた国民を 異国の軛から解き放つ——  
ああ！ この崇高きわまりない光景が <sup>いにしえ</sup>古の歌のように  
ただ 「空想」の戯れの 創作の主題とならねばならぬのか  
冗談の そしてまた謎の？  
(『ドン・ジュアン』XIII. 10. 1-7)

バイロンが、「最初にして最後の念願、愛するギリシアの自由と独立」“his first and last aspirations were for Greece, her liberty and independence”を、<sup>19)</sup> 文学の主題から人生のそれとする決意を固め、母国のギリシア委員会に申し出したのは、この第

13巻を書き上げた1823年の2月であった。その希望が容れられて準備を整え、ジェノヴァを発ったのは5ヶ月後の7月で、ホメロス風のヘルメットを造らせ、乗船した船の名は奇しくも「ヘラクレス号」であった。「ヘラの栄光」を意味するこのギリシア第一の英雄と詩人との符合はまだ続く。バイロン終焉の地となったミソロンギオン一帯の古名はカリュドンであるが、そこはまた、ヘラクレスに死をもたらした妻ディアネイラの故郷でもあった。

詩人の死後、ミソロンギオンの陣営で発見された第17巻の未完の草稿には、抒情と諷刺の間を大きく揺れ動いた詩人の墓碑銘とも言うべき自画像が描かれていた——

快活ながら——ときには泣きたい気にもなり  
柔和ながら——ときには「狂乱のヘラクレス」とも化す  
だから わたしはつい思ってしまうのだ 同じ皮膚が  
外側では一人を——内側では二・三人を包んでいるのかと  
(『ドン・ジュアン』XVII. 11. 7-8)

この英雄の怒りと同化させながら、複雑な自己の姿をおどけのうちに諷刺したこの詩行には、やがて愛するギリシアに殉じようとする自身の、ヘラクレス——ヘラに代表されるギリシアの大地母神（ディアネイラをも含む）の栄光に殉じた英雄——への親近感が滲んでいる。

## 6. 白鳥の歌

ミソロンギオンがトルコの艦隊に包囲され、絶望的苦境に陥ったとき、バイロンは少年の日に予言されていた生涯二度目の危機である36才に達し、絶唱“On this day I complete my thirty-sixth year”を書いて、抒情美溢れるその白鳥の歌に多難な生涯を歌い上げ、散華の決意を明らかにした——

なんじ 青春を悔いるなら なにゆえ生き永らう？  
この地こそ 栄光の「死」とぐべきところ  
「戦場」なる 死地に馳せゆき  
捧げよ <sup>いのち</sup>なが生命を！

めぐりに求めよ——求めずとも見出されよう



つわもの  
兵の塚こそ なんじの望むもの

はるかに見わたし——なんじの地を選び

永久の憩いにつけ

(「1824年1月22日 ミソロンギオン この日われ36才を全うす」9, 10)

この“Soldier’s Grave”は、詩人が少年時代に愛読したオシアン詩の中で、英雄の死の後で繰り返され歌われた「勇士の塚」——あざみの綿が風に乗って流れるヒースの野の、流れのほとりの苔むした石積み——の情景を彷彿させる。英雄たちの凱旋門や記念碑、豪華な霊廟などの虚飾を蔑んできたバイロンの真情がこの句に溢れて、高潔な「白鳥の歌」の結びにふさわしいものとなっている。かくて、詩人がひたすら念じ続けた“first and last aspirations”は全うされたのである。

ギリシアの大義を擁護したバイロンの死は、イギリスの世論を動かし、ヨーロッパの自由主義者を結集させて、ギリシアの独立の機運を決定的にした。ギリシアの理想美に殉じたバイロンに、ギリシアの人々は最高の敬意をもって報いている。独立戦争の勇士が安らうミソロンギオンの「英雄の園」には、ひととき高くバイロンの像が立っている。ギリシア神話の英雄は、女神への愛に殉じて犠牲の祭壇に登ることにより、至福の島エリュシオンに永遠の生命を享受したとされているが、「最初にして最後の愛」に殉じたバイロンもまた、愛するギリシアの地に永遠の生命を得て顕彰されたのである。また、アテナイのザッピオン公園に立つ白大理石の群像『ヘラスとバイロン』では、内なる蛇を折伏し愛を捧げる詩人に、ヘラスは優しく微笑んで栄光を授けている。ギリシアが生んだ最高のバイロン批評と言えよう。<sup>20)</sup>

#### 註

- 1) 本稿は、1998年10月25日の第51回日本英文学会九州支部大会（於：九州産業大学）における特別講演に基づいたものである。
- 2) Letter to John Murray, October 12, 1817, *Byron's Letter and Journals*, ed. Leslie A. Marchand (London: John Murray, 1976), vol. 5, p. 268.
- 3) 両者については、それぞれ、ハロウ時代の断片的習作“Fragments of School Exercises: From The Prometheus Vincit of Aeschylus”と“Translation from the *Medea* of Euripides”が処女詩集 *Hours of Idleness* に収められている。
- 4) Notes from Byron's own manuscript in a copy of the 1806 edition of *Ossian*, William Lyon Phelps, *The Beginnings of the English Romantic Movement* (London: The Atheneum Press, 1893), p. 154. 拙編著『光のイメージ——伝統の中のイギリス詩』（桐原書店、1985）、pp. 626-64参照。
- 5) Herbert Read, *Byron* (London: The British Council, 1951), p. 27.

- 6) Detached Thoughts: October 15, 1821—May 18, 1822, 79, Marchand, vol. 5, p. 268.
- 7) 『光のイメージラリー』 pp. 626-29参照。
- 8) Parliamentary Speeches; Debate on the Frame-work Bill, in The House of Lords, February 27, 1812 and Debate on the Earl of Donoughmore's Motion for a Committee on the Roman Catholic Claims, April 21, 1812, *The Works of Lord Byron: Letters and Journals*, ed. Rowland E. Prothelo (London: John Murray, 1898), vol. 2, pp. 424-45.
- 9) 拙論「バイロンとシェリー——プロメテウスの火をめぐる」, 『英詩評論特集——バイロン生誕200年』第5号 (中国四国イギリス・ロマン派学会編, 1988), pp. 110-28参照。
- 10) Keiko Uesugi, "The Altar to the Moon Goddess—On the Greek Myths in *Childe Harold's Pilgrimage* IV", *Essays on Poetry: Special Issue in Honour of Emeritus Professor Bunsei Uesugi, Winner of the Chugoku Culture Prize* (中国四国イギリス・ロマン派学会, 1992), pp. 283-323.
- 11) 拙著『バイロン研究』(研究社, 1978), pp. 13-15参照。
- 12) 湖畔詩人サウジーも同様に, 「コルクのように浮き上がった」(*The Vision of Judgment*, cv. 3) と諷刺されている。『バイロン研究』 pp. 403-4参照。
- 13) Claude M. Fuess, *Lord Byron as a Satirist in Verse* (New York, 1964), p. 182.
- 14) Elizabeth Longford, *Byron's Greece* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1975), p. 82.
- 15) たとえば, 阿部知二『バイロン』(東京: 研究社, 1937) 参照。
- 16) Andrew Rutherford, "Byron of Greece and Lawrence of Arabia", *Lord Byron: Byronism—Liberalism—Philhellenism*, ed. M. Byron Raizis (Athens: The University of Athens, 1988), pp. 11-28.
- 17) *Medwin's Conversations of Lord Byron*, ed. Ernest J. Lovell (Princeton: Princeton University Press, 1966), pp. 91-92.
- 18) *Medwin*, pp. 231-33.
- 19) *Medwin*, pp. 269-70.
- 20) 拙論「バイロンのギリシア——愛と自由の聖地」, 前掲「英詩評論特集」 pp. 68-81参照。